マルクスの価値形態論と労働の抽象化

正　木　八　郎

I はじめに

商品世界での日常的交換行為への悟性的反省たる古典派の価値実体論に批判的に内在しながら，マルクスがさしあたり思惟的抽象によって，いわば無媒介的に導出したものが，「まぼろしのような対象性」([7]52)としての「価値抽象」([7]65)とその実体としての抽象的人間労働であった。商品論の次元で，交換関係から導出されたことからいっても，抽象的人間労働というカテゴリーは，本質的に「社会的実体」(*ibid.*)であり，廣松渉氏とともに，「一定の社会的関係からの被媒介的な反照規定」([4]155)とみなさなければならない[1]。マルクスが『資本論』の第1章第1，2節で導出したかぎりでのこのカテゴリーは，価値形態が価値にとっての「必然的な表現様式」，「現象形態」([7]53)であることを根拠づけるものとなっている。抽象的人間労働が，表面としての商品世界での交換関係を固有のエレメントとするカテゴリーである以上，価値形態の展開が商品世界の成立と相即すると解するならば，先行の諸節で無媒介的に導出されたこのカテゴリーの生成の過程，換言すれば労働の過程的抽象化の客観的構造は，むしろそこではじめて提示されるといわねばならない。その場合に重要なことは，このカテゴリーを，社会的で一般的な性格をもつものとして当初から前提できないだけでなく，そのものとしても与件とみなすことはできないということである。たしかにマルクスの立脚点は，「商品の価値形態または価値表現は，商品価値の本性から出てくる」のであって，その逆ではないということであるが([7]75)，それは，価値実体の論証がすでに完了していることを必ずしも意味しない[2]。

廣松氏は，『資本論』の価値形態論のなかに，価値の「実体論的規定」の「再措定」を見出される([4]169)。あの「回り道」([7]65)の論理が「要訣」をなし([4]137)，この「『廻り道』の論理構制の呈示」によって，労働の抽象化の「過程的構造」が示される([4]171)。単純な価値形態(以下第1形態と呼ぶ)では，それは「自己完結的なものとみなすかぎり」，上衣の生産・所有者を「ストレートに抽象的人間的労働の主体とみることはできない」。この労働の「抽象性」は，上衣の生産者が「裁縫労働の主体であるということまでであって……ここではまだ，労働の種類の差異は払拭できない」([4]147)とされる。そして全体的な価値形態(以下第2形態と呼ぶ)ではじめて，等価形態に置かれた諸商品の現物形態が「直ちに“抽象的人間的労働”の体化物」として現われる([4]140-1)。労働の抽象化の「過程的構造」はこの第2形態と，一般的価値形態(以下第3形態と呼ぶ)で定式化される「汎通的・社会的な関係行為」([4]150)とにおいて，完全に示されるといわれるが，事実上，第2形態で，この抽象化の完成がいわれる。

「価値関係」を「過程的関係」([20]175)と理解された宇野弘蔵氏の場合，次のようになる。第1形態での価値表現で行なわれる抽象的人間労働への還元は，「ただちに両者に共通な抽象的人間労働」への還元ではなく，「リンネルの織物労働を具体的な上着の裁縫労働に等しいものにするという『回り道』をして行なわれる抽象」である。そこでは「1つの労働が他の労働に等しいものとして現われるのであって，ただちに一般的な抽象的人間労働として表わされるわけにはゆかない」([21]136)。第2形態では「価値を形成するものとしての人間労働の抽象性もまた明確になってくる。マルクスのいわゆる『無差別なる人間労働』たることが実証されてゆくわけである」([21]145-6)。第3形態ではじめて，「リンネルをつくる労働は，そのままあらゆる商品をつくる労働の一般的な社会的な形態となる」。だがそれは，「リンネルをつくる労働自身がかくのごとき捨象を受けないということによってのみ可能」なのであって，この労働も「価値を形成する社会的実体としての労働自身にそのまま還元されるのではない」([21]151-2)。使用価値について，それからの解放は貨幣形態で実現するともされているが([21]156)，実際には，この解放は，氏の場合，労働力の商品

---

1) また拙稿 [24]，[25] をも参照せよ。

2) H.-G. バックハウスも，「抽象的労働」といった「価値〈実体〉論」に属する概念は，「価値概念の〈展開〉のより具体的諸段階」ののちに「論証されうる」としている([2]39)。

化をまって完成され，それに対応して労働の抽象化も実現されることになっている。労働の過程的抽象化の視点は示唆的であるが，商品論での実体規定を必要と考えるわれわれの見地とはやはり一致しない。貨幣形態においてさえ等価物の使用価値が捨象されないことと，そこで労働の抽象化が完成することとは相容れないことではない。むしろ使用価値が捨象されないもとで，労働の抽象化が完成することこそが，商品世界の固有の構造を端的に表現しているということが重要である。氏は，労働の抽象化を文字通り実在的な次元で考えられたことによって，この点を理解されなかったといえよう。

久留間鮫造氏の所説にもじつはわれわれの見地に近いものが見出される。氏によれば，価値実体の導出は，「思惟的抽象」によるが，その結果「得られた抽象的労働の概念は，労働の客観的抽象化が何故に，またどのような過程を通して行われるか，ということの認識によって，はじめてその意味内容を豊富にされる」。それは「価値形態論以下」で可能となる([20]96-7)。第1形態では上衣は「抽象的人間的労働」の「体化物としての存在」に帰着させられるが，この労働が「単にリンネルを作る労働と上衣を作る労働とに共通なものとしての抽象的人間的労働にすぎないことはいうまでもない」とされる([6]76)。第1形態での労働の抽象化の不十分さがこのように表現されるわけである。久留間理論をめぐる議論の検討は別途を期したいが，宇野氏に引き寄せられた結果かどうかはともかくとして，氏の所説には労働の過程的抽象化の構造が価値形態論で提示されるという了解が，その端緒的形態で存在する。以下において，これらの諸見解を考慮しつつ，労働の過程的抽象化の客観的構造の論証として，マルクスの価値形態論をとらえることが可能かについて吟味してみよう。

II 価値表現と労働の抽象化との〈切断〉

まず予想されるように，このわれわれの見地から『資本論』に接近するとき，じつは少なからぬ困難に直面することになる。マルクスは第1形態論で，織布労働との等置から，裁縫労働を抽象的人間労働へと還元し([7]65)，上衣の現物形態が「抽象的人間労働の具体化として認められる」としている([7]72)。だがたとえば廣松氏にとって，上衣が抽象的人間労働の体化物であるという立言は，第2形態で可能なのであって，その意味では第1形態と第2形態との間に「論理の飛躍がある」ことになる([4]146)。しかし同時に第1形態は第2形態の「1モメントであるかぎりにおいて」，前者について，この労働への還元とその現象がいえる。マルクスは「“先廻り”して論定している」(同上)が，第1形態が「決して歴史的な次序で先行するものではなく，第2形態の1モメントである以上，この論理的次序に鑑みるとき，これは方法論的に許される議論の方式」だとされる([4]140)。だがなぜ先回りが許されるのか，定かではない。氏は，価値形態論のなかにあの「過程的構造」を見出そうとする見地に，ある意味では抵触するような〈譲歩〉によって，困難を回避しようとされる。

『資本論』の価値形態論の実際の展開は，かかる見地からの接近を拒否するかのようにもみえる。マルクスは『資本論』の初版本文で，「決定的に重要なことは，価値形態と価値実体と価値量との内的必然的な連関を発見すること，すなわち観念的に表現すれば，価値形態は価値概念から発していることを論証する」([8]34)ことであると述べている。この文章は初版付録以降削除されるが，たとえば初版付録以降の第1形態論で，アリストテレスのあの限界に関連して，「価値概念」が同等性としての人間労働と直接的に結びつけられている([7]74)ことからみても，価値概念のうちに実体規定が含まれていることはいうまでもない。価値形態が価値概念から内的必然的に生じるということからは，まず次のような理解が成立しうる。価値概念と実体＝抽象的人間労働とを論証ずみの与件ととらえ，価値表現の構造および表現の展開過程と労働の過程的抽象化とを〈切断〉し，その上で，価値表現の構造を，価値概念と実体の表現様式の面でとらえ，表現の展開過程を，価値概念および実体とその表現様式との間の整合性という面でとらえるべきだという理解である。

マルクスが各形態ごとに人間労働一般の表現様式，現象形態の特徴に言及していることは明白である。第1形態でのあの「回り道」の論理にしても，等価形態の第2の特色——具体的労働としての裁縫労働が「抽象的人間労働の手でつかめる実現形態」として織布労働に対置されている([7]73)——にしてもそうである。第2形態論の冒頭でも，リンネル価値はそこで「はじめてほんとうに，無差別な人間労働の凝固として現われる」，「なぜならば，このリンネル価値を形成する労働は，いまや明瞭に，他のどの人間労働でもそれに等しいとされる労働として表わされているからである」([7]77)となっている。第2形態から第3形態への移行については，マルクスは，それを，人間労働の「特殊的な」「現象形態」，「完全な，または全体的な現象形態」から，その「統一的な現象形態」への移行として特徴づけている([7]78 f.)。最後に

第3形態論では，リンネルの「物体形態」が，「いっさいの人間労働の目に見える化身，その一般的な社会的な蛹化」として，織布労働が「人間労働一般の一般的な現象形態」，「一般的な社会的形態」として規定されている([7]81)。

このようにマルクスは，われわれの見地を拒否し，抽象的人間労働を論証ずみの与件とする理解を積極的に根拠づけているようにみえる。『剰余価値学説史』以降の，リカードウとベイリーへの両面批判[3]，さらに「価値のうちにただ社会的形態」だけをみる「復活した重商主義」([7]95 vgl. 75)への批判の必要性の認識を通して，マルクスは，『資本論』初版以降にみられるように，価値概念を価値形態に解消することなく，前者の規定を踏まえたうえで，両者の内的必然的な連関，つまり価値概念の表現の構造を考察していることは否定しがたいように思われる。見田石介氏によれば，価値形態論の課題は，「価値形態を価値概念の必然的現象形態として証明すること」と，「価値形態の対立的2側面のそれぞれとそれらの統一を証明する」ことである([9]179)。とくに前者について，氏は第1形態の限界を「概念(本性)とその定在との不一致」に求められる([9]176)。第2形態についても，抽象的人間労働にとってその表示形式が不十分であることにその限界があると理解される([9]178)。同様に武田信照氏も，価値形態の発展は価値概念とその定在様式との矛盾の進展であるといわれる([17]49)[4]。

だが一見『資本論』によって根拠づけられているようにみえるこうした理解に問題がないわけではない。たとえば見田氏は，「抽象的労働そのもの」は「自然的な超歴史的な労働の1属性」であり，ブルジョア社会ではそれが「個々人の労働の社会性をなす」([9]92-3)とされたうえで，第3形態に関連して，「この価値形態がはじめて社会的実体の凝固物としての価値を完全に表現する形態であること」が「明らか」になる([9]178)といわれる。これからも推測できるが，抽象的人間労働は，「社会的実体」という規定性において論証ずみの与件となる。このことによって価値形態の展開が可能とされるのである。価値表現とその展開ということ自体に問題があるのではなく，この表現および表現の展開過程と労働の抽象化とを〈切断〉するところに問題がある。この立場からは，どのような過程を通して労働が，抽象的人間労働として「社会的実体」となるのかということは明らかにならないままである[5]。

そこでこの〈切断〉の立場からマルクスの展開をみた場合には，彼の展開はつぎのような曖昧さを含んだものとなる。すでに繰り返すまでもなくマルクスは，第1形態から，抽象的人間労働への還元を価値表現成立の基礎として提示するが，「社会的実体」としての抽象的人間労働はまさに，そのまったき抽象性を与件とすれば，その一般的で社会的な性格も，もちろん前提されることになる。したがって，この労働が表現され，またそれへと還元されてしまえば，この第1形態と第2形態との間の「本質的な変化」([7]84)は事実上表面的なものに解消されることになろう。廣松氏のように第1形態は第2形態の「1モメント」であると解すれば，この問題はなくなるといえなくもないが[6]，マルクスは，すでにみたように，第2形態論の冒頭で，この形態でリンネルの「価値そのものが，はじめてほんとうに，無差別な人間労働の凝固として現われる」(傍点—引用者)としている。ここから第1形態を回顧すると，逆にそこでの人間労働への還元，その現象は，仮象であったということになりかねない。マルクスはもっとも単純な2商品間の価値関係のなかで，価値表現の構造を詳細に分析する。その意味でも第1形態の設定は重要である。だがあの〈切断〉の立場に即してマルクスの展開をみると，第1形態と第2形態との間の「本質的な変化」は明瞭でなくなる。

これもすでに触れたように，第2形態から第3形態への移行規定のなかで，マルクスは前者の特徴を，人間労働の特殊的な現象形態，それの完全で全体的な，しかし統一性の欠如した現象形態として規定していた。第2形態のこの限界およびこの形態の転倒による第3形態の成立におけるマルクスの論理は，われわれの見地にとっても重要な意義をもつが，それはIIIで立ち入るとして，ここではあの〈切断〉の立場に立つときに生じる，いささか細かい問題だけを指摘しておこう。

まずこの移行規定のなかで与えられている第2形態の限界それ自体は明白である。そこでの価値表現の性格

3)　この両面批判の意義については，Rubin([14] 107 ff.)，武田信照氏[16]，竹永進氏[18]，廣松氏[4]をもみよ。

4)　同様の立場に立つものとしてまた尼寺義弘氏[11]がある。

5)　それゆえこの立場は，『資本論』第1章第2節での抽象的人間労働の生理学的規定を根拠としている。この規定をどう理解すべきかについても拙稿[24]を参照せよ。

6)　「モメント」という理解に問題はないが，しかしだからといって，第1形態論で，完成した＝実現した労働の抽象性をいわねばならない必然性はないと思われる。

(「未完成」,「多彩な寄木細工」, どの商品の価値も, 自己以外のすべての商品で表現されるという性格)は, この形態の「価値表現列」から演繹されうる([7]78)。しかしそれでもたとえば, この第2形態の限界としての特徴づけと第2形態論冒頭の規定との間の整合性が問題となろう。現象形態がいまだ不完全であることを明らかにしている移行規定からみたとき, リンネル価値が「はじめてほんとうに, 無差別な人間労働の凝固として現われる」という冒頭の規定はどう理解するべきなのか。あの〈切断〉の立場からすれば, これら両者は整合しえないとみなさざるをえないだろう。また第3形態で,「私的労働」が「一般的な社会的形態に, すなわち他のすべての労働との同等性の形態にある」([7]81)とされているが, この規定と, 第1形態論のなかの等価形態の第3の特色,「私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になる」([7]73)という特色――これは第2の特色から直接的に導出される――との間に, いったいいかなる差異があるかという問題が生じるだろう。「一般的」性格が「本質的な変化」とされるが, 労働のまったき抽象性=社会的性格を与件とすれば, この差異そのものも意味をもたなくなるだろう。

要するに, 価値表現の展開と労働の抽象化とを〈切断〉し, この労働を与件として価値概念にふさわしい価値表現様式を求める立場から『資本論』に接近するとき, 逆にまた, たんに叙述形式上の問題に還元することができない以上のような諸問題が生じると思われる7)。

III　労働の過程的抽象化の論証

たしかにマルクスは, 各段階においてそれへと還元され, また現象する抽象的人間労働や私的労働を通して現象する社会的形態での労働について, その広がりと深さの範囲についてなんら明言していない。だが宇野氏や廣松氏の指摘をまつまでもなく, たとえば第1形態での2商品間の価値関係のなかで, 労働の抽象性すなわち社会性が完全な形で現象するわけではなく, したがって実現されているわけではないということはいわば当然のことであって, マルクスもそれを自明のこととしていたのではないかと推測される。第1形態論中の注で彼が示したあのペテロとパウロの関係についても([7]67), 孤立した1者と1者との関係から, その1者の肉体を通して, 種属としての人間一般なる概念が完成されて現象するはずはない。出来上がった広汎な社会的関係を前提として,「人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに」([7]74), そこでの, すでに社会的存在となった1者と1者との関係を取り出したときにのみ, かかることがいえる。少なくとも人間一般なる概念の形成=表現を問うときには, 1者と1者との関係のなかでは, この前提を, 1度は捨象して, ただパウロの肉体から抽象されるかぎりでの限定された〈人間〉が現象すると考えるのが当然であろう。マルクスがいう質的同等性も, このような意味において理解されるべきである。「ある1つの商品Bでの表現は, ……ほかのすべての商品との商品Aの質的な同等性と量的な割合とを表わすものではない」([7]76)。この質的同等性がまだ表現されていないということは, 第1形態では, 労働は, ただ上衣の物体形態を生産する1つの具体的労働が抽象化されたものにすぎないことを意味する。

しかしわれわれの見地は, 第2形態から第3形態への移行と後者の規定のなかで, より積極的に根拠づけられると考えられる。第2形態と第3形態との間の, 無限につづく特殊性の集合体としての全体性と, 単一の商品による真の社会性, 一般性の実現との区別は, 決定的な意味を持つ。この区別は次のことを意味するだろう。自立した私的諸労働が展開される分裂し転倒した社会においては, それを商品世界という位相で統合する一般性は, 諸個別者の各々すべてが自己以外の無限に多数の他の個別者と関係をとり結ぶことによって, みずからを一般者へと高めようとする行為から実現され根拠づけられるのではなく, 逆に諸個別者が一般者への可能性を喪失し, ある個別者を一般者として排除することによって実現され根拠づけられるということである。そこではいくら特殊性を集合させても, それは決してまったき社会性としての一般性の実現になりえないということは, つまり第2形態の段階では, 商品世界を統合するものとしての労働が, 抽象的人間労働=「社会的実体」としてまだ真に完成していないことを意味する。この真の社会性としての一般性がある1者(貨幣形態では特定の1者)に体現されることによって, 労働の抽象化が完成し, それは抽象的人間労働という規定性において「社会的実体」となる。同時にこの抽象化の完成によって, そして1者がつねに固有の現物形態を伴うことによって, この労働は日常的意識から完全に捨象される([7]88)8)。マルクスが第2

7)　以上の問題の根本を宇野氏は, マルクスが人間労働への還元のされ方の相異よりも, 結果としての還元そのものを重視したことに求められた([23]210)。

8)　この面は, のちに言及するように, 価値形態論ではもちろん捨象されるべきであろう。

形態を「個別商品の私事」([7]80)，第3形態を「商品世界の共同の仕事」(*ibid.*)，「商品世界の社会的表現」([7]81)として特徴づけていることもかかる意味で理解されるべきである。

第2形態の転倒による第3形態への移行については，早くから疑義が提出されているが[9]，むしろこの転倒こそ重要である。この転倒からの第3形態の成立こそは，近代ブルジョア社会の転倒した存立構造を，その商品世界という位相で全体的に，だがそれを構成するブルジョア的諸主体の意識構造をさしあたり捨象して，抽象的に表現しようとしたものである。価値表現と労働の抽象化とを〈切断〉して，抽象的人間労働の現象形態を，特殊的，集合的か，それとも統一的，一般的，社会的かという外面的区別において理解する仕方では，この転倒の真の意味は見失われるのではないかと思われる。というよりもこの〈切断〉の立場は，価値形態の展開の論理を，外面的技術的操作に解消して理解するように思われる[10]。第3形態では，「商品価値に対象化されている労働は，現実の労働のすべての具体的形態と有用的属性とが捨象されている労働として，消極的に表わされているだけではない。この労働自身の積極的な性質がはっきりと現われてくる。この労働は，いっさいの現実の労働がそれらに共通な人間労働という性格に，人間の労働力の支出に，還元されたものである」。そして第3形態は，「この世界のなかでは労働の一般的な人間的性格が労働の独自な社会的性格となっているということを明らかに示している」([7]81)。マルクスのこの文章も，あの〈切断〉の立場を根拠づけるようにみえる。だが転倒の意味をわれわれのように理解すれば，この文章も，一般的等価物による交換領域の商品世界への統合が，同時に「社会的実体」として完成され，抽象化(人間労働一般なるものへの抽象化＝還元)の完成した労働によるこの世界の統合の完成であるということを事実上意味すると解しても妥当であろう。根本的には，その独特な性格によって，労働については，関係における表現過程＝関係における生成過程と理解せざるをえないのである。この表現と生成との対応した過程が可視化，意識化への過程でなく，その逆であることはいうまでもない。

ところでマルクスはすでに第2形態で，リンネルは「商品世界にたいして社会的な関係」に立ち，「商品として」それは「この世界の市民である」([7]77)と述べている。この規定と第3形態との比較からは，Ⅳで触れることと関連するが，これら2つの形態が歴史的順序としてではなく，基本的には論理的順序として，それゆえ第2形態も当然，出来上がった商品世界からの論理的抽象として提示されていると判断しうる。だがここではリンネルが商品世界の「市民」とされていることに注意する必要がある。商品世界の「市民」と，その世界を統合する1者とは明らかにその性格を異にするとともに，この1者の存在によってはじめてリンネル(相対的価値形態にあるものとしての)はこの世界の「市民」たりうる。この「市民」の行為はあくまでも「私事」である。だがこの「私事」こそが1者を生み出し，たえずその存在を根拠づける。かかる意味で，たとえ同じ商品世界からの論理的抽象であるとしても，第2形態が，この世界の統合を捨象して(つまり特殊性の集合体として)，当然先行しなければならない。そしてそのなかで労働の抽象化の過程が提示されるのである。このようにみてくるならば，『資本論』の先行諸節でマルクスがさしあたり，無媒介的に導出した抽象的人間労働は，この第3形態においてその完成に到達するといえるだろう(完全な意味では貨幣形態においてであるが)。

労働の過程的抽象化の客観的構造の論証を価値形態論に求めるというわれわれの見地が，価値形態論をめぐるさらに立ち入った諸議論にどのように接近できるかは，なお検討の必要があるが，ここでは，どうしても触れざるをえない1つの重要な論点についてだけ，以下でとりあげておこう。

Ⅳ　労働の抽象化と論理—歴史問題

じつはわれわれの見地をむしろ明白に支持するかのようにみえる議論が『資本論』のなかにある。マルクスは第1形態論で，「商品形態の発展は価値形態の発展に一致する」([7]76)と述べ，第3形態論では，先行の2つの形態を回顧して次のようにいう。第1形態が「明らかに実際に offenbar praktisch 現われるのは，ただ，労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである」が，第2形態が「事実において tatsächlich はじめて現われるのは，ある労働生産物，たとえば家畜がもはや例外的にではなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのことである」([7]80)。この叙述が，価値諸形態の展開を商品交換の実在的，歴史的発展と直結させたものであることは明らかである。そしてそのことによってわれわれの見地がそこで直接に根拠づけられたか

9)　周知のようにその代表的なものとして富塚良三氏[19]が挙げられる。

10)　見田氏([9]178)，尼寺氏([11]205以下)をみよ。

のようにみえる。価値諸形態の展開がこのような実在的な歴史的〈事実〉に対応させられることによって，この展開を通してなされる労働の過程的抽象化ももちろん，歴史的過程からの抽象として，そのかぎりで歴史的実在の次元で把握されうることになろう。

価値形態論での論理と歴史とのこのような対応にたいしては，あの〈切断〉の立場は，見田氏による〈論理＝歴史〉説批判からも推測できるように，消極的である——「非歴史的分析」，「時間的歴史的順序に照応しない移行」の重視([9]173)——。むしろ〈切断〉の立場は，ここから成立したともいえる。またすでにみたように廣松氏も否定的であった。だがあの対応はマルクスの叙述のなかに厳然と存在している[11]。たとえばバックハウスは，当初は論理的解釈の立場に立っていたが[1]，『資本論』第2版以降の価値形態論のなかに〈論理的—歴史的傾向〉が〈事実〉として存在することに直面して，みずから困難に陥ったことを告白している[2][12]。G. ゲーラーも，『経済学批判』から『資本論』第2版までの価値形態論の方法上の変化を，「強意の弁証法」から「縮小された弁証法」への変化として特徴づけ，後者を「直接的に歴史的な論証を組み入れた」([3]150)「発生論的再構成」([3]145)と規定した。論理と歴史との対応が『資本論』の価値形態論のなかに存在するという事実が，たとえばこのように，深刻な動揺をよび起こし，また弁証法的方法の変化として特徴づけられたりするのである。

ところが他方で，労働の過程的抽象化という点では多少とも示唆的であった宇野氏の場合には，かつての河上肇氏の場合の直接的対応[5]ほどではないとしても，ある意味では当然だが，価値形態論自体の抽象性という点で，それは「具体的な歴史的発展」にも「共通する形態の発展」であり，それを「頭にうかべること」によって展開されるといわれる([22]204–9)。価値諸形態の展開を，商品の商品としての生成の過程として理解される中野正氏の場合にも同様のことがいえる([10]207)。さらに労働の過程的抽象化というわれわれの見地の先駆者ともいえる I. I. ルービンも，一方では「単純商品経済」([14]64)なるものを「資本主義経済の基本的諸特徴からの抽象」([14]90)としてとらえ[13]，そこでの交換過程における労働の抽象化を述べながら，他方でマルクスの価値形態論の形成を論じるさいには，価値諸形態間の移行を「(論理的および歴史的)移行」([13]94)と理解する。このように価値形態論が同時に労働の過程的抽象化の構造の提示であり論証であると理解するわれわれの見地は，ともすれば，マルクスの展開のなかにみられるあの歴史的〈事実〉との対応に引き寄せられる危険性をつねに伴っているといえよう。

この問題の本格的議論のためにはなお多くの論点を考慮に入れなければならないが[14]，ここでは次のことだけを確認しておくにとどめる。『資本論』現行版の価値形態論にみられる歴史的〈事実〉への言及は，労働の過程的抽象化という見地をけっして積極的に根拠づけるものではない。現実には貨幣を媒介とした交換が行なわれている完成した商品世界を前提としながら，なお貨幣形態生成の論証のために，貨幣を捨象した2商品間の価値関係から出発することが論理的に許されたのとまったく同じ意味で，労働の過程的抽象化の客観的構造も，その貨幣形態生成の論証のなかで，論理的に提示されうると考えてよいだろう。価値にしても，具体的労働の抽象化にしても，事実問題(praktisch, tatsächlich)としては，交換者の日常的意識作用なしにはありえない。だが価値形態論ではこれは捨象されうる。そしてこの捨象によってこそ，価値形態論は歴史的〈事実〉からの再構成という形式をとる必要がなかったのである。完成した商品世界では，貨幣を媒介とした交換に固有の意識しか成立しない。抽象的人間労働も，「価値とはなんであるか」([7]88)ということも，その生成の過程においては意識作用が関与したにもかかわらず，結果的には，その生成の過程も含めて完全に意識から捨象されている。したがって価値表現の展開＝労働の抽象化について，意識の契機を導入すれば，多少とも各歴史段階における諸〈事実〉に対応させて議論せざるをえなくなるといえるだろう。それゆえ基本的にはあくまでも論理的展開として理解されるべき『資本論』の価値形態論は同時に，労働の過程的抽象化，換言すれば，労働の「社会的実体」への論理的生成の過程の論証であるといえよう。だがもちろん以上の議論からも推測できるように，マルクスの価値形態論

11)　おそらくこのこともあって，見田氏もその対応には消極的でありながら，基本的には論理的である価値形態の展開が，各形態の「歴史的な諸形態」という性格によって，そのかぎりで，歴史的発展に照応するとされる([9]151)。

12)　バックハウスのこの自己批判については佐藤金三郎氏[15]を参照せよ。

13)　しかし彼はこの点で曖昧であったという批判がある。Projekt Klassenanalyse([12]148 ff.)。

14)　本稿ではこの点を考慮したために，まず『資本論』現行版に限定した。『資本論』第3節と第4節，第2章との関連，『批判』から『資本論』にいたる形成過程については，さらに検討をつづけたい。

をこのように一義的に解釈しうるかどうかについては，なお多くの異論が成り立ちうるかもしれない。

(大阪市立大学経済学部)

引用文献

[1] Backhaus, H.-G.: Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie 2, in: Gesellschaft 3, Suhrkamp, 1975.

[2] ders: Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie 3, in: Gesellschaft 11, Suhrkamp, 1978.

[3] Göhler, G.: Die Reduktion der Dialektik durch Marx, Klett-Cotta, 1980.

[4] 廣松渉『資本論の哲学』現代評論社，1974年。

[5] 河上肇『資本論入門』第2分冊(1932年)，青木文庫。

[6] 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店，1964年。

[7] Marx, K.: Das Kapital, Bd. 1, Buch 1., (Marx-Engels Werke, Bd. 23) 邦訳『全集』版第23a巻，大月書店。

[8] ders.: Das Kapital, 1Aufl., 1867 (岡崎次郎訳『資本論第1巻初版』国民文庫)。

[9] 見田石介『資本論の方法』弘文堂，1972年。

[10] 中野正『価値形態論』日本評論新社，1958年。

[11] 尼寺義弘『価値形態論』青木書店，1978年。

[12] Projekt Klassenanalyse: Zur Debatte über das System der Kritik der politischen Ökonomie der UdSSR, in: Rubin, I. I., u. a.: Dialektik der Kategorien, VSA, 1975.

[13] ルービン，イ.「『経済学批判』と『資本論』における価値と交換価値」佐藤金三郎訳『エコノミア』第70号(1881年3月)。

[14] Rubin, I. I., *Essays on Marx's Theory of Value*, Black & Red, 1972.

[15] 佐藤金三郎「『資本論』研究の現状と展望」『経済評論』No. 291 (1979年4月)。

[16] 武田信照「マルクスの価値形態論(1)」『法経論集　経済・経営篇I』第96号(1981年8月)。

[17] 同上「価値形態論と交換過程論(上)『法経論集経済・経営篇』第75号(1974年5月)。

[18] 竹永進「S. ベイリーの価値論と60年代初頭のマルクス」『経済学雑誌』第77巻第1号(1977年7月)。

[19] 富塚良三『増補恐慌論研究』未来社，1975年。

[20] 宇野弘蔵・向坂逸郎編『資本論研究—商品及び交換過程』河出書房，1948年。

[21] 宇野弘蔵『価値論』青木書店，1965年。

[22] 同上『演習経済原論』(『著作集』第2巻，岩波書店，1973年。

[23] 同上『経済学方法論』東大出版会，1965年。

[24] 正木八郎「商品論と抽象的人間労働」『現代思想』第3巻第13号(1975年12月臨時増刊号)。

[25] 同上「抽象的人間労働と経済学批判」『名城商学』第27巻第3号(1977年12月)。